博士学位申請論文要約

石川淳戦後小説研究
―〈歴史〉と〈近代〉を問う　石川淳の一九五〇年代～一九八〇年代

帆苅　基生

□本論の目的

本論は、石川淳が敗戦後から一九八〇年代までに発表した小説を中心的な対象として論じるものである。戦後、社会が変容していく中、また文学の、とりわけ〈純文学〉の枠組みが問い直されていく。石川淳の小説はそれとどのように向き合っているかを明らかにすることで、戦後文学を中心とした日本近現代文学史、ならびに戦後文化史を問い直す契機になることを目的とする。

戦後、太宰治や坂口安吾等とともに〈無頼派〉と称された石川淳だが、他の〈無頼派〉の作家たちが早世していくなかで、〈無頼派〉の生き残りとして、また〈最後の文人〉として文壇内や文学愛好家に高く評価をされている。

しかしその一方で、小説についてもその他文学活動全体についても、石川淳は近現代文学研究であまり扱われていない。また当初石川が論じられる際には、「精神の運動」という石川本人がたびたび用いていた言葉で、個々の小説を細かく論じるよりも、石川淳の文学的営為の中に「精神の運動」が行われていると讃えることに帰着してしまっていた。こうして石川淳を近現代文学史上における〈特異〉な作家として位置づけ、その〈特異〉性を追認し賞賛するという形で論じられてきたといえる。特に一九五〇年代には井澤義雄、菅野昭正などフランス文学出身の文芸評論家が石川淳を積極的に評価し、フランスの象徴詩と対照しながら、石川淳の小説は、世俗から切り離された、自律した物語世界が構築されていると高く評価した。こうして石川淳は世俗から離れた〈特異〉な孤高の作家、〈最後の文人〉として高く評価されることになった。

しかしこうした石川淳への賛辞が、むしろ石川淳を同時代の諸現象と照応するのを避け、日本近現代文学史の中から切り離してしまい、結果的に日本近現代文学研究の中から石川淳が取り残されてしまった一因になったのではないか。

その後文芸文化史という観点から野口武彦（『石川淳論』一九六九）、や鈴木貞美（『昭和文学のために』一九八九）などが石川の文学活動を位置づけようと試み、それを継承する形で、個々の小説を同時代の諸言説や諸事象に照らし合わせながら、石川淳の文学的営為に迫ろうという研究がなされた。近年では山口俊雄（『石川淳作品

研究』二〇〇五）、若松伸哉（『わたしと世界を象ることば』二〇一九）などがその代表として挙げられる。しかしこれらの諸研究が中心としているのは、石川の文学活動の前半と言える一九四〇年代までであり、戦後、特に一九五〇年代以降に関しては多くの余白が残されている。

上記先行研究に加えて特筆したいことがある。一九五〇年代ではフランス文学出身の文芸評論家から評価された石川淳であるが、一九七〇年代後半から八〇年代にかけて、〈江戸〉との関連性から論じられるようになる。例えば花田清輝（『日本のルネッサンス人』一九七五）や、八〇年代以降に起きた江戸ブームの中で脚光を浴びた論客である田中優子（『江戸の想像力』一九八六）がそれにあたる。彼らは、石川淳と〈江戸〉の関連性を指摘し、石川が戦中に書いた評論「江戸人の発想法について」の中に近代的な思考からこぼれ落ちてしまったものが鋭く指し示されている、と高く評価している。また言うまでもなく野口武彦も近世文学の研究者である。

いずれにしろ一九三〇年代から一九八〇年代後半に至る石川淳の長期にわたる文学活動の全貌が捉えがたく、石川淳の小説を始めとした諸テクストが近現代文学研究の中から取り残されてしまっている現状がある。

そこで本論では、まだまとまった研究がなく、多くの余白が残されている、石川淳の戦後の小説を主な対象とする。孤高の〈最後の文人〉と称された石川淳を、同時代の諸現象・諸言説と照応させることで、戦後社会が変容する中で、それとどのように向き合っていたのかを明らかにする。

石川淳と〈江戸〉の関わりについて指摘した評があることは前述したとおりだが、石川淳自身が、「江戸人の発想法について」を書いた戦時中を振り返って、江戸に留学したと語っている。その〈江戸〉留学体験が、戦後になって石川の小説の中に活かされていくことを、先に石川と〈江戸〉の関わりを指摘した論を継承しつつ、石川淳の〈江戸〉への関心が〈歴史〉や〈近代〉そのものを問う、根源的な問いが含まれていたことを明らかにしていきたい。それを明らかにすることは江戸以前と切断することで説明されてきた日本近現代文学史を見直す契機になることにもつながると考えている。

以上本論では、石川淳の戦後の小説の試みを考察することで、従来の〈近代〉や〈近代文学〉の枠組みを新しく捉え直すことにつなげることを目指すものである。

□時代設定

本論で中心的に論じる時代は敗戦後から一九八〇年代の後半までである。

戦後の〈焼跡〉から文学活動を再開させた石川淳は〈無頼派〉の一人とされた。〈焼跡〉はすべてが滅びた絶望の経験であると同時に、絶望の淵から這い上がる、スタートラインとして捉えられた。他の〈無頼派〉の作家同様に、敗戦からの戦後復興は既

成の秩序がすべて滅びた中で新たな歩みを始める、再始動の時期であるが、石川淳にとってこの〈焼跡〉はそこから出発していくというものではなく、むしろ〈焼跡〉に踏みとどまるように、イメージが後に度々用いられることになる。

しかしすべて滅びたはずの〈既成の存在〉が、戦後の国際状況の変化に伴って、再び息を吹き返すいわゆる〈逆コース〉の時代を迎えることになる。石川は現実社会を変革する〈革命〉をモチーフにした小説を連続して書くことになるが、一九五〇年代半ばを過ぎて現代を舞台にした小説を書くことをやめ、歴史的空間を素材にした小説を書くことになる。

この石川の変化を杉浦晋（「石川淳『鷹』試論―二つの「鳩」と「鷹」をめぐる試み―」『国語と国文学』二〇一一年一月）などは、社会状況や国際的な体制の変化から、現実社会での革命を夢見ることを諦めた石川が歴史的空間によく言えば韜晦（悪く言えば逃避）して言ったと論じるわけだが、本論では歴史的空間に小説の舞台を変えた石川の試みを積極的に評価していく。なぜなら、一九五〇年代は〈歴史〉が問い直され、また大きな歴史の中に埋もれていた〈民衆〉の存在が浮かび上がってきた時期だからである。国民的歴史学運動など同時代の状況に石川淳がいかに呼応していたかを見ていくことで、〈歴史〉の諸相と向き合おうとしていた姿が明らかになるだろう。

六〇年安保改定の後、アメリカの傘下に組み込まれた日本は国際的な枠組みの中での立ち位置が固まっていく。また戦後復興から高度成長の中で所得倍増を代表とする「成長と安定の物語」を歩み始め、大阪万博のスローガンの「人類の進歩と調和」のように社会は変革することよりも安住することを求めていく。しかし一見戦争の傷跡も消え、「成長と安定の物語」を順調に歩んでいるようにみえる社会の中には多くの歪みや亀裂が走っていた。その亀裂に焦点を当てたのが松本清張や水上勉といった社会派推理小説の代表的な作家たちだっただろう。このような状況に石川淳はどのようなスタンスをとりながら向き合ったのか。一九六〇年代から晩年の一九八〇年代まで石川は長編小説を書いていく。これらの多くは歴史的空間を舞台として、〈歴史〉そのものを問い直すものとなっている。そこには安丸良夫をはじめとした〈民衆史〉の研究成果からの影響もうかがえる。なぜこのような時期に、また長編小説としてこれらが書かれたのか、同時代状況を参照しつつ考察していく。

本論で扱う約四〇年間は、戦後社会が変容しただけでなく、文学のあり方も問われていく時期であった。〈文学〉の側から見ればこの四〇年間は衰退の過程であったとも言えるのかもしれない。「純文学変質論争」を始め従来の文学の枠組みが大きな変化にさらされていく。〈文学〉がかつての立場や影響力を落としていく一方で、漫画や雑誌文化、テレビを中心とした映像文化が人々の間に浸透し、影響力を持っていく。しかし一九六〇年代から試みる石川淳の長編小説から眺めてみると、別のものが見えてくる。長編小説「狂風記」は一九七一年から九年間に及んで集英社が発刊した『すばる』に連載される。一九二六年に小学館より娯楽部門として分離して設立された集英社は、戦後になって雑誌・コミックを核にして急速に発展する。一九六〇年代から

文芸部門にも事業を広げ、文芸書や美術書を出版していく。漫画やファンション誌の成功を元手に一九七〇年に季刊誌として文芸誌『すばる』が創刊され石川淳が招かれることになる。〈文学〉の変質や終焉が議論されていく時代に、出版社の戦略として、一流総合出版社の条件とされた文芸部門の充実を目指して、集英社は看板として文芸雑誌を立ち上げることになり石川淳が用いられた。これは〈文学〉の衰退期とされる時期に、むしろ〈文学〉を掲げるような動きも見えるのである。石川淳はこのような状況を好機と捉え利用して、「狂風記」をはじめとして晩年の長編小説を書いていったことがうかがえる。

□本論の内容

第一部　「〈焼跡〉に踏みとどまること」では、石川淳が文学活動を開始する大正期から、戦中の〈江戸留学〉、そして戦後〈焼跡〉からの再始動について論じた。父の逮捕と家計の困窮という事態が、石川淳に進路変更を余儀なくさせたが、結果的にこのことが文学活動へと本格的な舵を切らせることになる。また戦時下において、「マルスの歌」の弾圧により、時局を表現することが困難になった時、石川は〈江戸留学〉と呼ぶ、江戸文芸の世界に沈潜する経験をする。そしてそれを「江戸人の発想法について」にまとめた。このこと自体が『萬葉集』全盛の時代に、批評的意味があった。しかしそれだけに留まらず、「江戸人の発想法」を学ぶことで、後の石川淳の戦後小説にもつながる「見立て」や「やつし」の技法を習得することになった。また近代的な発想にはないものを、「江戸人」から見出すことで、もう一つの〈近代〉のあり方を模索するきっかけを与えた。この戦時下の〈江戸留学〉が戦後の活発な文学活動を下支えするものとなったと言えるだろう。だからこそ敗戦直後に、浮浪児に「クリスト」の姿を幻視する「焼跡のイエス」のような小説を書くことが出来たのだった。戦後の〈焼跡〉から文学活動を再開させて石川淳は〈無頼派〉の一人とされる。〈焼跡〉は絶望の経験であると同時に、絶望の淵から這い上がる、スタートラインとも捉えられた。しかし「焼跡のイエス」で描かれる〈焼跡〉は単純な出発ではない。むしろこの敗戦からの戦後復興にむかう秩序と秩序の〈隙間〉の時間は既成の権力がすべて滅びた時であり、石川にとってはこの〈間〉の〈焼跡〉を踏みとどまる場として捉え、以後イメージとして用いられることになる。第一部では、困窮、弾圧、敗戦という負の経験をして満身創痍になった〈焼跡〉から立ち上がり、そしてそこに踏みとどまって、立ち続ける、石川の戦後小説で描かれるものの予兆が示されることを論じた。〈焼跡〉を「千載一遇」のチャンスと捉え、文学活動の原点として、戦後小説群の中にそのイメージが結実されていく。

第二部「パロディの批評性」では、戦中の〈江戸留学〉から学んだパロディの技法について論じた。オリジナルのものこそ独創性があり、芸術的価値が高いとされる近代芸術の規準の中では、パロディは低く扱われる。従来石川淳の小説の中でもパロディ小説は、余技の書き物のような扱いを受け、代表作として挙げられることがなかっ

た。しかし後に集英社文庫の『おとしばなし集』としてまとめられる石川淳のパロディ小説群をまとめて見てみると、新たな論点が見えてくる。本論で明らかにしたことは、実はパロディの技法こそが、〈江戸留学〉で石川が学んだことであり、五〇年代後半から書かれる〈歴史〉を問い直すことをモチーフとしている小説は、〈歴史〉をパロディにしたものだとも言え、戦前・戦後の石川淳の文学活動を繋ぐものであるという点だ。その試みが後の長編小説にも繋がっていく。そう考えると五〇年代のまとまった時期に石川がパロディを盛んに書いていたことがいかに重要なことかを本論では論じた。またこれらのパロディが書かれた時期は、戦後社会や政治体制がさまざまに蠢く時であった。「天皇の人間宣言」や沖縄の占領の継続、東西冷戦体制が確立していく中での日本の国際的位置取り、そして経済成長の始まり、こういった同時代の状況を見据えていることが見えてくる。しかしそれをあくまで〈物語空間〉に落とし込んで虚構の中で描き出していく。このような技術が磨かれることになり、後の長編小説へと繋がっていくのだ。本論では石川のパロディ小説の巧みさとその魅力を明らかにした。

第三部「〈忘却〉の拒絶」では、一九五〇年代半ば書かれた石川淳の代表作の一つである「紫苑物語」とその周辺について論じた。今まで現実社会からは隔絶されたものとして評価されてきた「紫苑物語」を中心とする一九五〇年代後半に書かれてきた短・中編小説に共通しているモチーフが、〈忘却〉の拒絶であるということを明らかにした。「もはや戦後ではない」という言葉に代表される、戦後復興から高度成長へとつながる時、〈焼跡〉が経済成長の中で覆い隠されていくように、過去を〈忘却〉し、「安定と成長」の物語に安住しようと、記憶と〈歴史〉がさまざまな場で〈忘却〉され、場合によっては改竄されていく。そのような状況の中で〈忘却〉しないことを描くことで、高度成長に踊る同時代に対峙していたことを論じた。まさに第一部で論じたように、〈焼跡〉に踏みとどまる姿がイメージとして継承されていくのが、この時期の小説であったと言えるだろう。

第四部「偽史への転換」で、〈忘却〉の拒絶がモチーフにされる時代を経ることで、権力による歴史が〈忘却〉され改竄される、歴史修正主義をテーマにしたものが書かれていくことに着目した。その転換に「新釈古事記」で、石川自身の解釈・解説を入れながら「古事記」を現代語訳する経験が大きく影響していることを考察した。「古事記」をただ現代語訳するだけでなく、時の権力者の操作の形跡をも読み込むことで、権力によって編纂された歴史を疑う姿勢が示される。これは後の長編小説にも継承されていくことを論じた。「新釈古事記」を経て、「八幡縁起」では権力者によって〈忘却〉させられていった出来事の裏側には何があったのかを描く、偽史がモチーフとされている。また石川が権力者によって編纂された〈歴史〉の裏側に関心を持つ背景には、国民的歴史学運動などの当時の、〈歴史〉の中に潜む民衆に目を向ける文化運動に影響を受けていたからだということを明らかにした。また「修羅」では権力者が〈改竄〉した歴史を、焼き尽くし〈奪還〉していく姿が描かれる。これらの小説は具体的な時代や場所が定められていくことで、〈史実〉とされることと小説で描かれること

が参照可能な形で描かれる。歴史的空間が舞台とされ、偽史が素材とされる小説ではあるが、実は同時代の諸現象と照応することで、批評的なねらいが明らかになることを論じた。また司馬遼太郎のような実証史学を補完するような歴小説とも、松本清張のように実証史学の定説を疑い、歴史の隠された真実を描くという姿勢の小説とも違う、石川の〈偽史〉の小説が持つ、遊戯であるからこそ持ち得る批評性について論じた。

第五部「〈歴史〉と〈近代〉を問う」では、石川の晩年の長編小説群を扱った。さまざまな文学論争が起き、〈文学〉の枠組みが変容していく、一九六〇年代から一九八〇年代に書かれた石川淳の長編小説を論じることで、文学のみならず戦後文化・現代文化の変容の様相を考察した。六〇年代は、六〇年安保の自動締結に象徴されるように、日本はアメリカの傘下に組み込まれるという国際的な枠組みの中での立ち位置が固まり、敗戦後から五〇年代の蠢きを失っていく。一方高度成長による「成長と安定の物語」に安住し、〈焼跡〉も消え、安定しながら順調に歩んでいるように一見思われていた。しかし社会の中には多くの歪みや亀裂が走っていた。このような状況の中で石川淳は〈現在〉が立つ土台の〈歴史〉そのものを問い直すと同時に、日本の〈近代〉の歩みをも問い直す小説を描いていく。幕末の隠れキリシタンが革命を起こすことを模索する「至福千年」では、明治政府史観の中で語られる維新の志士たちが切り拓いた近代という視点からは抜け落ちてしまう、市井の人々の中にある変革を求める胎動を描いていく。そこには国民的歴史学運動をもとに発展した〈民衆史〉の研究成果からの影響がうかがえることを明らかにした。長編小説「狂風記」は、文学の変質や終焉が議論されていく時代に、集英社の戦略として文芸雑誌を立ち上げ、破格の待遇で石川淳が招かれることになった。石川淳はこのような状況を好機と捉え利用して、「狂風記」をはじめとした晩年の長編小説を書いていく。戦後派の作家は〈全体小説〉を提唱し、様々な実験的な長篇小説を書くことに意欲的であったが、石川の「狂風記」は〈総合小説〉と呼ばれるもので、従来の文学活動の総決算としてさまざまなものを注ぎ込む場が与えられたことを明らかにした。ここには石川が戦時下の〈江戸留学〉、そして敗戦後の〈焼跡〉の経験、そしてパロディの手法を援用しながら描かれていく。近代とは名も無き群衆から、ひとりの個人的主体を持った存在という人間観が確立した時代であり、そして個人的主体をもった国民が国家を形成していくという、近代の個人観や国民国家としての意識が芽生えた時代として捉えられている。そして過去・現在・未来と均質に流れて行く時間は不可逆的なものであるという合理的精神に支えられている。しかし「狂風記」を始めとした石川の長編小説群は、〈近代〉や〈近代文学〉を支えてきた理念を問い直すもので、近代社会や近代国家が支えとしてきた言説が揺さぶられていくものであることを明らかにした。太宰治、坂口安吾等とともに〈無頼派〉〈新戯作派〉とされた石川淳は、他の作家が世を去る中、ひとり一九八〇年代まで生き残った。戦後社会が変容し、また〈文学〉の枠組みも変わっていく中、石川淳の戦後小説群は、〈無頼派〉〈戦後派〉と称された時に〈焼跡〉に対峙していたのと同じように、一九八〇年代に至っても、敗戦後の〈焼跡〉に向き合った意識が

継承され、既成の秩序や権威に対して常に対峙し続けたということを論じた。

それでは〈焼跡〉に対峙し続けることで、石川淳の戦後小説は何を見出したのだろうか。それは「狂風記」で描かれたように、ひとつひとつの出来事や、一人一人の個人は切り離されたものではなく、他者とつながり、過去や未来ともつながる、重層的な存在であるということだ。そこには、〈近代〉や従来の近代文学の概念が見落としてきた、〈可能性〉を見ることができると明らかにした。